

古典期ギリシアのプロクセノス制度

——前五世紀のアテナイを中心に——

はじめに

古代ギリシアには、プロクセニアと呼ばれる制度が存在し、ギリシア全土においてその存在が確認されている。この制度の運用を任された者がプロクセノスであり、プロクセノスの資格は、評議会及び民会の決議を経て賦与される公的なものであった。

さて、ギリシアポリス世界には、他ポリスとの交渉を行う大使も、他国において自国の通商の促進や自国民の保護などにあたる領事も存在しなかったが、代わりに、プロクセノスがその時々が必要に応じてそれらの職務を請け負っていた。プロクセノスは、「権益代表者」または「国賓」などと訳されているが、自分の属するポリスにおいて、あるポリスからプロクセノスの資格を与えられて、そのあるポリスの利益を任せられ、そのポリスから公用、私用を問わずやって来る者たちの世話をする役目を担っていた。また、プロクセノスは、プロクセノス賦与ポリスにおいて、様々な特権を与えられている。実際にプロクセノスが行った外国人への世話は、外国使節の歓

待の他、彼のポリスに滞在中の外国市民が訴訟事件などに巻き込まれた際に、その人の代理人としてその人の権利を擁護することなどが挙げられる。また時には自分のポリスの外交使節として、自分がプロクセノスを務めるポリスへ赴き交渉を行うこともあった。いわば、プロクセノスとは、今日の大使と領事、さらに特使を兼任するような職務であったといえる。プロクセノスについて史料上確認できる一番古い例は、前七世紀末と推定されており、その後、前五世紀半ばには、プロクセノスは全ギリシア世界に普及し、ポリス間の外交において重要な役割を果たした。

プロクセニアに関する研究は、十九世紀以来かなりの蓄積がなされており、プロクセニア碑文の分析又はプロクセノスの職務についての包括的研究などが数多く発表されている。主だった研究を振り返ると、先ず Perihan⁽²⁾ による前四世紀のプロクセニアの政治的側面の研究がある。彼はポリスの外交政策とプロクセニアの賦与とが密接に関わり合っていることを示唆することで、プロクセノスの果たした政治的役割の重要性について言及している。また、ポリスの

岡澤亮子

影響力を対外的に拡張させるために、そしてポリス間の提携を強化するために、プロクセシアはポリス間の国際関係に不可欠な要素であったとしている。次に、Wallaceにより前五世紀半ばまでの初期プロクセノスの役割についての研究が発表され、彼は公的な外交制度としてのプロクセシアの成立を前六世紀半ば頃と位置づけている⁽³⁾。また同時期の重要な研究として、Walbankの研究が挙げられる。彼は前五世紀アテナイの現存するプロクセシア碑文全てにわたっての綿密な分析を行っている。そして前五世紀におけるアテナイの帝国化の要因の一つをプロクセシアに求め、デロス同盟に属するポリスの全てに、アテナイのプロクセノスが置かれていたと主張する⁽⁴⁾。

さらに近年においても、Marekによるギリシア各地におけるプロクセシアの使用及びプロクセシアの機能についての研究があり、彼は初期プロクセシアの機能の検討から、その起源について従来からのクセシア起源に異論を唱え、相互の客人接待の習慣であるクセシアと公的制度であるプロクセシアとの関連を否定している⁽⁵⁾。しかしクセシアについての新たな解釈のもと、クセシアとプロクセシアの関連を多面的に調べたのがHermanであり、彼はMarek説を否定している⁽⁶⁾。さらに、プロクセシアの機能の新たな面についての研究として、Gerylmatosが諜報機関としての重要性に目を向け、多くの例を提示しその詳しい分析を行っている。特にペロポネッス戦争期において、プロクセノスが諜報機関として大いに機能を果たしたことを強調している⁽⁷⁾。彼の研究は、プロクセシアの機能の新しい側面に光をあてたことにおいて評価され得るだろう。しかし、史

料分析には曖昧な部分があり、想像に依拠しているところが多い点など問題点も指摘されている⁽⁸⁾。

以上のような研究史上の問題点を考慮しつつ、本稿では前五世紀アテナイにおいて、アテナイ帝国発展のためプロクセシアがどのように利用されたのかを個々のプロクセノスの活動内容から検討していきたい。そしてプロクセシアの役割の変化、また外交制度としてのプロクセシアの存在意義を考察することを試みる。

一 アテナイの対外拡張政策とプロクセシア

それでは、前五世紀のアテナイのプロクセシア史料の検討に入りたい。現存する前五世紀アテナイのプロクセシア碑文は八五例あり、同時期の他の決議碑文などと比べてもかなり多く残っているといえる。もっともWalbankによれば、デロス同盟参加都市は少なくとも三五〇都市を数え、アテナイはその同盟都市のそれぞれに、プロクセノスを任命していたとされるので、実際に賦与されたプロクセシアは八五例どころではなく、かなりの数にのぼることが推定される⁽⁹⁾。

さて、実際にプロクセノスがアテナイに対してどのような協力をしたのかを、個々の史料から検討したい。ペロポネッス戦争が始まるまでのアテナイのプロクセノスに関する碑文及び文献史料は、前述した八五例中の二五例である。(時代確定が曖昧なものも含む)そしてこのうち、プロクセノスとなる人物がアテナイに対して功績をなしたと記してあるものが九例あり、さらにその具体的内容について知らせるものが四例ある。

① マケドニアのアレクサンドロス (Hdt. 8. 136-43; 9. 45-16)

アレクサンドロスは、ヘロドトスによれば前四八〇/七九年の冬にはアテナイのプロクセノスそしてエウエルゲテース (Eubolus) (10) であつたとされている。このプロクセノスの例は、文献史料のみに記述されているものであるが、ヘロドトスの記述はおそらく公的な布告に基づくものであろうと推測されている。(11) ことでのプロクセノスの役割は、まずペルシア側の使節として、和平交渉のためアテナイへ派遣され、アテナイへの友好的な気持ちから、ペルシアの提案に従うように助言したことが記されている。(12) さらに、プラタイアイの戦いの前には、ギリシア軍を訪れ情報を提供したと伝えられている。(13) ここで最初に示された役割は、ペルシア側の和平提案を伝える使節という公的かつ政治的な役割と見ることが出来る。一方、次に示された役割は、戦いを前にしての一種の情報提供者と見做すことができるのではないだろうか。Gerolymatos は、このことからある種の諜報機関としての役割が、すでにこの頃から機能していたのではないかと想定している。そしてアレクサンドロス以後、アテナイ人はプロクセニアの諜報機関としての可能性を上手く利用するようになったと述べている。(14)

② テーベのピントタロス (Isokrates, 15. 166)

インククラテスによれば、ピントタロスは彼の詩の中でアテナイのことを、「ギリシアの防護者」(15) と詠んだことでアテナイによってプロクセノスとされ、さらに一万ドラクマが与えられたとされている。おそらくこれは、前四七五年頃のことと思われる。この例も文献史料のみに見出されるものであるが、インククラテスが伝えるように詩

だけによる功績でプロクセニアが賦与されたのか、あるいは他にもアテナイに対して功績をなしたのかなど不明確な点が多い。また、報酬の一万ドラクマという額も法外であるように思われる。実際インククラテスの記述には、信頼できないところがあり、このような功績によるプロクセニアの賦与は疑わしいものと見るべきであろう。(16)

③ イッサ?のバリアノスと彼の息子達 (IG^I 18)

この碑文は欠損部分が多く、プロクセノスの名前、出身地についても異なる解釈が試みられてきた。Walbank の解釈によれば、プロクセノスはイッサの市民バリアノスと彼の二人の息子アテノドロスとイケシオスである。(17) そして、前四五五/四年にレスボス島へ(またはから)、アテナイの軍隊を運ぶために使用された三隻の船の件で、彼らを顕彰しているものとする。ただし、その功績に対してのプロクセニア賦与を記載するものではなく、すでにプロクセノスである三名、及びイッサの他の有力者への賞賛と新たな特権の賦与を記録しているものと考えられる。もし、それが正しいならば、ことでのプロクセノス達の動きは、彼らの個人的な協力というよりも自分たちの共同体を代表しての公的な協力と見ることが出来るように思われる。

④ キュプロス?のテラメネスとラケダイモニオス (IG^I 30)

この碑文も欠損がひどく、プロクセニア碑文であるかどうかも不確かであるとされる。Walbank は、飢饉の時にアテナイ人と軍のために尽力したことで、テラメネスとラケダイモニオスを褒め称えたものであるとしている。(18) これは、前四五〇/四九年にキモーン指揮下のアテナイ軍がキュプロス島を攻めた時、キモーンが倒れ、飢

鐘にも見舞われた為に撤退した際のことであろうと推測できる。⁽¹⁹⁾この例にみられるプロクセノスの行動は、アテナイ人への物資の援助であり、平時であればプロクセノスの行動としては当たり前のことである。しかし自国がアテナイ軍に包囲攻撃されている時であれば、自国への背反行為となるであろう。プロクセノスの忠誠は自分を任命したポリスにのみ誓われるものなのであるうか。この問題はプロクセノスとその任命ポリスの結びつきを考える上で非常に重要なものとなってくる。

以上のように、この時期のプロクセノスの仕事としては、このような物質的援助が主たるものであったと思われるが、そればかりではなく、デロス同盟内の反抗的なポリスにおいては、監視役としての職務も果たしていたと考えられる。これは、①のマケドニアのアレクサンドロスのような情報提供者としての役目の延長されたものと見ることが出来る。そのような役割は、アテナイとスパルタの間の緊張が高まるにつれ、さらにプロクセノスの重要な役割の一つとなっていくたものと思われる。

二 ペロポネソス戦争とプロクセニア

続いて、ペロポネソス戦争の時期、すなわち前四三一年から前四〇四年の間のプロクセニア関連史料の検討に移ることにしたい。アテナイとスパルタの関係が悪化するにつれて、プロクセノスの役目も高まる緊張関係に即して、さらに重要なものとなっていった。具体的には、軍との密接な関わりを持ちたり、さらに軍の中の組織としての機能を果たすなどした。それでは、何らかの形で軍と関係を

持ったアテナイのプロクセノスの例を次に挙げる。

① 三人のイリュリア人 (IG¹ 162; Thonk. 4 125; 1)

トゥキユデイデスによると、前四三三年スパルタの將軍ブラーシダースとマケドニア王ペルディッカースは提携して、ペルディッカースと敵対関係にあったリユンケースティア人の王アラバイオス攻撃のため進軍し、リユンコス勢を圧倒した。リユンコス勢は、後退して敵の出方を見守り、一方ブラーシダース・ペルディッカース連合軍は、ペルディッカースのもとに参加するはずのイリュリア人の到着を待っていた。しかしイリュリア人は、ペルディッカースを裏切りアラバイオスの味方になった、と記述されている。⁽²⁴⁾この件に関係すると思われる碑文 (IG¹ 162) も残されており、Walbankの解釈では、その碑文は三人のイリュリア人へのアテナイのプロクセニア賦与を記録したものであるとされ、⁽²⁵⁾その三人はアテナイ人のポリスとアテナイの軍に善行をなしたためにプロクセニアを与えられたとしている。そして碑文の時期を前四二〇年頃とし、この碑文の内容とトゥキユデイデスの記述は関係があるものと見ている。要するにペルディッカースからのイリュリア人の離反には、碑文に記された三人の働きが大いに関与したのではないかとすることである。そしてその功績によりアテナイからプロクセニアが賦与されたことは十分考えられることである。

② ギュルトーン (テッサリア) のカリッポス (IG¹ 92)

前述の前四三三年の戦いの後、ペルディッカースはアテナイ人と和議を結び、アテナイへの忠誠を示すために、彼は以前から親交のあったテッサリア勢の有力者たちに働きかけて、スパルタ側の増援

軍の進路を閉鎖させた⁽²⁶⁾。しかし、スバルタ勢が自国領に進入することを好ましく思わなかったのは、ベルディッカーズだけではなかった。ここにギュルトーンのカリッポスへのプロクセニア賦与の碑文 (G¹ 126) がある。彼はアテナイ人のポリスへの好意によりプロクセニアを得るのであるが、Walbank はカリッポスの行為が、軍事的な協力であった可能性を示唆している。また、Gerolymatos も、ペロポネソス勢がテッサリアを横断することを許可しないようにテッサリア人たちを説得したことで、カリッポスにプロクセニアが与えられたということは十分に考えられると主張している⁽²⁸⁾。

③ セリュムブリアのアポドロスの他一名 (G¹ 118)

前四〇八年、セリュムブリアはアルキビアデス麾下のアテナイ軍によって攻略されたのであるが、セリュムブリア人の中には、密かにアルキビアデスと通じてポリスを引き渡そうとする一味がいたとされている⁽²⁹⁾。そしてアルキビアデスがアテナイに帰還した後、彼によってセリュムブリア人のアポドロスともう一人にプロクセニアを賦与することが提案された (G¹ 118)。おそらく、この二人はアルキビアデスに協力した一味に関係する者たちであろう。この場合、アテナイ軍への協力は、自分たちのポリスに対する裏切り行為であるが、彼らはそれによってプロクセニアを手に入れたわけであり、ここでもプロクセノスの忠誠の対象が問題となってくる。

④ ゴルチュン (クレタ) のニキアス (Thouk. 2. 85. 1-6)

トゥキュディデスは、アテナイのプロクセノスであるゴルチュンのニキアスについて興味深い話を残している。前四二九年、コリント湾におけるアテナイ艦隊とペロポネソス艦隊の戦闘において、両

軍ともに援軍を要請し、アテナイは直ちに二〇隻の船隊を派遣した。しかし、その船隊を指揮する者に、最初にクレタ島に行くことを命じた。その理由は、ニキアスがアテナイに敵意を抱くキュドーニアをアテナイ側に従えることを約束して、船隊のキュドーニア行きを承知させたためであった。しかしニキアスの真意は、キュドーニアの隣国であるポリクネーの歛心を買うことにあった、とトゥキュディデスは述べている⁽³⁰⁾。このニキアスの真意についてはそれを裏付ける証拠はなく、そこから色々な憶測が可能であるが、ニキアスの真意はともかく、この史料からプロクセノスが、軍事戦略にまで関与し得たことが想像される。また、アテナイにとってクレタ島が重要地域であったことも読み取れる。この時期、クレタ島はアテナイの支配圏外にあったが、エジプト・リビアとアテナイを結ぶ通商航路上に位置し、アテナイにとっては航路の安全のためキュドーニアを制圧しておく必要があったのかもしれない⁽³¹⁾。

これらの例は、プロクセノスのアテナイ軍への協力を示しているが、特に③、④は、ポリス攻略のためプロクセノスが積極的に利用されたことを示唆している。おそらく自分のポリスのみならず、周辺ポリスの政情にも精通したプロクセノスは、極めて有効な戦力としての役割を果たしたことが想像される。ところで、プロクセノスは本来何らかの奉仕をした者に賦与されるものであるが、次に挙げる諸例は、まずプロクセノスの称号が与えられて、そのかわりにアテナイのために奉仕することが命じられた例である。そのようなプロクセニアの賦与がされるようになったのも、多分プロクセノスの軍事面での有効利用が認識されるようになったためと考えられる。

⑤ アプデーラのニウムポドロス (Thouk. 2. 29. 1.)

トゥキュデデスによると、前四三一年「…アテナイ人は、アプデーラ人でビューテースの子ニウムポドロスを、以前には（アテナイの）敵と見做していたが、ニウムポドロスの姉妹をシータルケースが妻にしており、彼はシータルケースに対して強い影響力を持っていたので、（アテナイの）プロクセノスに任命し、（アテナイへ）呼び寄せた。アテナイ人は（ニウムポドロスを通じて）トラキア王でテレーレスの子シータルケースと同盟を結ぶことを望んだのであった」⁽³²⁾そして、ニウムポドロスの仲介の結果、シータルケースはアテナイの同盟者となり、さらにニウムポドロスは、トラキア地方の争いを終わらせることを約束し、ベルディッカスも説得してアテナイと和解させた、と述べられている。このプロクセノスの大きな特徴は、前述したようにニウムポドロスはまずプロクセノスに任命され、そのかわりとしてシータルケースとアテナイの仲介を果たすことが指示された点である。ここで疑問となることは、どうしてニウムポドロスがそれまで敵対していたアテナイのプロクセノスとなり、アテナイのために働いたのかということである。彼の動機については、プロクセノスの称号とともに与えられた特権及び報酬の魅力、さらにアテナイと提携することで得られる何らかの利益が想像されるが、それを確かめるための史料は残されていない。また、アテナイ側の意図は、シータルケースとの同盟だけではなく、トラキア地方の情勢を監視するためにプロクセノスを設置することであったとも推察できる。ヘロドトスには、ペロポネソス戦争の初期、トラキアを通してペルシアへ向かう途中の二人のスパル

タの使節が、ニウムポドロスとシータルケースに捕らえられてアッティカに送られた話も記されている。⁽³³⁾

この例にみられるニウムポドロスとアテナイの関係は、初期のプロクセニアにみられたクセニア的な友好関係に基づく相互扶助関係とはもはや言えないように思われる。プロクセノスは、完全にその任命ポリスの一地方組織としての役割を果たすようになったと言えるかもしれない。

⑥ コロフォーンのアポロノファネス (IG¹ 65)

トゥキュデデスによれば、前四三〇年、コロフォーンはその内紛に乗じたペルシア勢によって奪われ、そこに住んでいたコロフォーン人はノティオンに移住したとされている。しかし、ノティオンでも党争が生じ、敗れた一派は亡命者となってアテナイに援助を求めた。そして要請を受けたアテナイ勢はノティオンを攻略し、コロフォーン人にノティオンを返還した後、アテナイの植民市として建設した。⁽³⁴⁾これ以後のことについて、トゥキュデデスは何も述べていないが、アテナイの植民政策の一端について、アテナイの碑文 (IG¹ 65) が語っている。この碑文は、アポロノファネスへのプロクセニア賦与を記載したものであるが、おそらく、彼は党争の時にアテナイ軍に援助を乞うた親アテナイ派の一人であろう。碑文はまず型通りにアテナイの人々と兵士たちへの彼の奉仕を顕彰し、続いてアポロノファネスに、アテナイ人のために港の安全を管理することを命じている。具体的には、港を守る人々を監視する役目であった。イオニア沿岸の港はアテナイ艦隊の補給基地となっており、その安全を確保することは、アテナイにとって必須であった。また敗

れた反対派の残党がノティオン内に潜伏している可能性も考慮していたかもしれない。そこで、港の監視役として、その土地に精通しているコロフォーン人が任命されたものと推測できる。

アテナイのプロクセノスは、次第に監視役や情報提供役を務めるようになり、時には事前にその目的を明確に設定される場合もあった。またこの時期のプロクセノスの多くは、軍事的に利用され、諜報機関としての役割を果たすことも多々あったと言うことが可能であろう。ここで、古代ギリシアの諜報機関とは、ということが問題となるが、以下ではその問題について触れてみたい。

三 諜報機関としてのプロクセニア

「スパイ」は、あらゆる時代、あらゆる場所に存在すると言われるが、それは古代ギリシアとて例外ではなく、ホメロスの時代から「スパイ」は存在しその活動を行っていた。⁽³⁶⁾しかし古代ギリシア世界においては、いかなるポリスも敵国あるいは仮想敵国についてのあらゆる種類の情報を、組織的に収集したり、分析したりするために確立されたスパイ組織を所有しているわけではなかった。⁽³⁷⁾これはポリスの制度が確立した後についても同様であり、諜報活動を組織するポリスの下部機構は存在せず、既存の組織が代行せざるを得なかった。Geoymanos⁽³⁸⁾は、その代行を請け負ったのがプロクセニアであったと力説する。プロクセニアは、公の又は秘密の諜報機関として機能することが可能であり、プロクセノスは政治的・軍事的情報を収集しそれを伝達したり、さらには政治的妨害・破壊工作を行ったりするのに適した地位にいたと論じている。そしてプロクセ

ノスが諜報活動に大きく関与する契機となったのが、ペロポネソス戦争であったとしている。⁽³⁹⁾諜報活動において、情報収集とその伝達は主要な活動の第一に挙げられるが、戦時における情報の重要性については、次に挙げるレスボスの反乱の例にも示されている。

トキユティデスによれば、レスボス諸ポリスが前四二八年ミュティレーネーを中心にレスボスを統一し、デロス同盟からの離反を計画した時、メーテムムネー、テネドスの人々とアテナイのプロクセノスであるミュティレーネー人らが、アテナイにその計画を密告したとされている。⁽⁴¹⁾そのプロクセノス達がアテナイ側に情報を提供したのは、「個人的な事情から」(Sōs)であると考えられる。⁽⁴²⁾その具体的内容については、アリストテレスが伝えている。彼によると、プロクセノイの一人は、デクサンドロスという者で、彼はある富裕な市民の娘を自分の息子の嫁に求めて拒絶されたために、その個人的な恨みから、ミュティレーネーを鎮圧するようアテナイを煽動したということである。⁽⁴³⁾

ただし、このアリストテレスの記述を認めず、私的怨恨ではないより強い動機からであるとしたり、⁽⁴⁴⁾寡頭派と民主派の党争によるものであるとする研究者もいる。⁽⁴⁵⁾しかし、ミュティレーネーのプロクセノイの行動には、支配政権に対する政治的に動機付けされた抵抗であったことを示すものは一つもない。この時期、すでにプロクセノスと党派との結びつきが見られる場合も想定できるが、その結びつきは前四世紀ほど顕著ではなかったと思われる。従って、このプロクセノイの行動は、最初はアリストテレスが言うように私的な理由に起因したのかもしれない。

一方、アテナイは、当初海軍を擁するレスボスを新たな敵とすることを望まず、レスボスに計画の中止を勧告した。しかし、相手側がそれに従わなかったので仕方なく鎮庄軍を派遣した。その時、アテナイに新たな情報もたらされた。その内容は、ミュティレーネー全市民が参加するアポロン祭がポリスの外で催されるので、それに間に合うよう迅速に行動を起こせば奇襲に成功するだろうというものであった。⁽⁴⁶⁾この情常は、戦略上において非常に重要なものであったにちがいない。この情報の提供者は不明であるが、おそらく先の情報の提供者と一致するものと思われる。⁽⁴⁷⁾

しかし、ミュティレーネー側にも敵船隊の接近を知らせる者がおり、⁽⁴⁸⁾両者は戦闘状態に入った。だが最終的には、ミュティレーネーはアテナイに降伏する。⁽⁴⁹⁾結果として、プロクセノイらによるアテナイへの情報の提供は、レスボスの反乱を失敗に導く大きな要因となった。すなわち、彼らが戦時におけるアテナイの諜報機関としての役割を十分に演じたことを意味する。

ところで、ペロポネソス戦争時には、純粋な軍事的情報ばかりでなく、他の情報もプロクセノスによってアテナイにもたらされた。例えば、戦争終結時までには、穀物供給の統制がアテナイの国政の重要課題となったが、穀物の主たる生産地である黒海方面とアテナイを結ぶ穀物供給ルートを確認するため、その地域には多くのプロクセノスが置かれた。プロクセノス達は、その地域の情報をアテナイに報告し、そのルートの掌握及び安全に貢献した。⁽⁵⁰⁾特にビュザンティオンは、戦略上の重要拠点であり諜報活動の舞台となった。また穀物供給ばかりでなく、造船用の木材の供給も重要問題であり、穀

物と木材の供給ルートを支配することは、ギリシア世界において、覇権を握ることを意味した。⁽⁵¹⁾実際、穀物と木材の供給の統制は、アテナイに他のポリスを支配する道具を与え、このアテナイの他ポリスに対する優位は、穀物と木材の宝庫である黒海地域への安全なルートを確保したことに大いに依拠するものであった。⁽⁵²⁾

プロクセノスの諜報的役割の大部分は、軍事的・政治的情報の収集に関するものであったと思われる。しかし、Geolymatosはギリシアポリスの国際関係において、重要な役割を演じた反乱の煽動や暗殺や転覆などの政治的干渉の多くにプロクセノスが関与していたとし、その役割はしばしば「政治工作員」のようなものであったと言及している。⁽⁵³⁾前に挙げたアプデーラのニムポドローロスなどはその一例である。すなわち、ニムポドローロスは、北ギリシアにおけるアテナイの外交政策が円滑に運ぶように工作したと言うことができる。さらに、デモステネスによれば、前三九〇—八九年のタソスの政変の際に、アテナイ軍がタソスを攻略できたのは、アテナイのプロクセノスであるエクファントスら民主派のメンバーがスパルタ軍を駆逐し、トラシユブローロス率いるアテナイ軍をポリス内に入城させたからであるとされる。そのために、その後復権した寡頭派政権により、エクファントスらは追放されている。⁽⁵⁴⁾

また、Geolymatosはプロクセニアの発展において、アテナイばかりでなく、スパルタ、コリントス、ポイオティアでも共通してみられることは、各々のポリスが、ギリシア世界に覇権を確立しようとする時には、諜報機関が重要な役割を果たしたことであり、それぞれ的外交政策及び軍事的野望を成就させるために、プロクセニ

アの諜報機関としての能力の開発に取り組んだことであると述べている。また、諜報機関としてのプロクセニアの利用は、それぞれのポリスの必要に応じて形は異なるが実質は同じであったとしている。プロクセニアは、ペロポネソス戦争を契機として諜報機関として利用されるようになった。それはプロクセニアがあらゆる目的に利用され得る便利な制度であったためであり、公的な制度とはいふものの、それはプロクセニアを賦与する立場においてであり、それを受ける人間は、多分に私的立場に置かれていたためであったと思われる。プロクセニアが制度として確立していた前五世紀後半においても、プロクセニアには依然として私的な部分が残されており、それゆえ諜報機関としての役割を演じることが可能であったと考えられる。

おわりに

古典期アテナイにおける各々のプロクセノスの活動内容を追うことにより、その時局の要請に合ったプロクセニアの役割を検討してきた。その結果、プロクセニアの制度としての柔軟性、適応性といふものが、逆に見ればポリスの公的な制度としての未熟さ、曖昧さというその性格が明らかになったように思われる。プロクセニアの融通性は、その賦与に際しては賦与を行うポリスの民会と評議会の決議を必要とする公的な制度でありながら、その資格を与えられたプロクセノス自身のポリスにおいては、他ポリスの利益を代表する公的立場を必ずしも認められていたわけではないという、いわば公的部分と私的部分が混在した制度であることに因るものであろう。

そしてプロクセニアは、必要に応じて様々な職務を担う融通の利く制度として発展を遂げたのである。それはまた、プロクセニアの起源が、既存のクセニアによる個人対個人の結びつきを共同体対個人の結びつきに置き換えただけであると見ることの論拠の一つとなるだろう。

最後に、プロクセニアが前五世紀のアテナイの外交史上に有した意義を整理してみることにする。まず、デロス同盟の盟主としてアテナイが対外拡張政策に乗り出した時には、プロクセノスはデロス同盟内の各ポリスに置かれ、それまでの主な役割であった外国人の歓待・保護に加え、政治的さらには軍事的役割を強化していった。その役割は単にアテナイへの物質的な援助に止まらず、政治交渉の仲介役あるいは同盟内の秩序維持のための監視役としても機能していた。つまり、プロクセニアは、アテナイ帝国を末端において維持するために重要な役割を果たしたと考えられる。また、アテナイとスパルタの間の緊張関係が高まるにつれ、プロクセニアは諜報機関として利用されるようになり、具体的にその事実を伝える史料は多いとはいえないものの、ペロポネソス戦争時には諜報活動に基づく戦略が多様されるようになったものと推察される。

このように、プロクセニアはポリスにとって最も有効な利用がなされるように、その時代状況に即して、その時代毎の目的を持ちつつ変化を重ねていったものと考えられる。さらに、本稿では触れられなかったが、前四世紀に入ると、プロクセニアは政治的側面を発展させ、プロクセノスは党派との結びつきを強めていった。今後はこのプロクセノスと党派との関係を分析した上で、全体的なプロク

セニアの特性及び存在意義を考察するに心を配つた。

註

- (一) 例として九世紀末葉から一〇世紀初頭にかけての P. Monceaux 以下に引く研究を挙ぐる。P. Monceaux, *Essai sur les Proxénies Athéniens*, Paris, 1882; *Les Proxénies Grecques* Paris, 1886; in Darnberg-Saglio, *Dictionnaire*, 4, 1, 1907, pp. 732-740.
- (二) S. Perlman, "A Note on the Political Implications of Proxenia in the Fourth Century B. C.", *The Classical Quarterly*, n. s. 8, 1958, pp. 185-191.
- (三) M. B. Wallace, "Early Greek Proxeno?", *Phoenix*, 24, 1970, pp. 189-208.
- (四) M. B. Walbank, *Athenian Proxénies of the Fifth Century B. C.*, Toronto and Sarasota, 1978.
- (五) C. Marek, *Die Proxenia*, Frankfurt, Bern, N. Y., 1984.
- (六) G. Herman, *Ritualised Friendship and the Greek City*, Cambridge, 1987.
- (七) A. Gerolymatos, *Espionage and Treason. A Study of the Proxenia in Political and Military Intelligence Gathering in Classical Greece*, Amsterdam, 1986.
- (八) C. Marek, Gnomon, 1988, pp. 594-598. トロヤ戦争の終結後、トロヤの没落と並行してトロヤの非難者 J. F. Lazenby, *Journal of Hellenic Studies*, 107, 1987, pp. 223-224. したがって非難者のトロヤ人を含む講義活動は従事して来た事例は認められる。
- (九) Walbank, *op. cit.*, p. 4, p. 24, n. 1.
- (一〇) エウクレイダス「風聞者」の称号は、プロクサネオスの称号と同じく被授与者に対し贈られた。プロクサネオスの称号が単独で贈られた例は、現存する碑文には見られない。(Walbank, *op. cit.*, p. 5)
- (11) *Ibid.*, p. 65; Wallace, *op. cit.*, p. 199.
- (12) *Ibid.* 8, 136-143.
- (13) *Ibid.* 9, 45-46.
- (14) Gerolymatos, *op. cit.*, pp. 25-27.
- (15) "Ἐπεροια τῆς Ἐλλάδος"
- (16) Walbank, *op. cit.*, p. 77; Wallace, *op. cit.*, p. 203.
- (17) Walbank, *op. cit.*, pp. 93-98.
- (18) *Ibid.*, pp. 109-115.
- (19) cf. Thouk. 1, 112, 3-4.
- (20) R. Meiggs, "A Note on Athenian Imperialism", *Classical Review*, 1949, pp. 9-12.
- (21) エレノペイカースはマナナヘト回國關係にあらたか (Thouk. 2, 99.)、回國船の争つた乗組員回國の勢力の増大を計り日和見的態度をとった。
- (22) リンカーヌスチマニア人は、プラキドニアの支配に服し、その北部内陸地帯に居住して来た (Thouk. 2, 99.)。
- (23) トムネイト非國賊 一帯をエウクレイダスに没収して居住 (Thouk. 1, 24.)。
- (24) Thouk. 4, 125, 1.
- (25) Walbank, *op. cit.*, pp. 231-237.
- (26) Thouk. 4, 132.
- (27) Walbank, *op. cit.*, p. 353.
- (28) Gerolymatos, *op. cit.*, p. 32.
- (29) Xen. *Hell.* 1, 3, 16; Ploutarchos, *Alcibiades*, 31, 2-6; Diodorus, 13, 66, 6-7.
- (30) Thouk. 2, 85, 1-6.
- (31) Meiggs, *The Athenian Empire*, Oxford, 1972, p. 217.
- (32) Thouk. 2, 29, 1.
- (33) *Ibid.* 7, 137, 3.

